高齢化社会をよくする女性の会会報

No. 16
1985年10月発行
高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-356-3564

—目　次—

第４回シンポ行わる …… １～３
第２部・分科会報告 …… ３～６
シンポを終えて …… ７
老人ホーム探訪 …… ８
オープンハウス③に参加して …… ９
グループ紹介 …… 10
声・お知らせ欄 …… 11
事務局だより …… 12

語り合おう、人生八〇年時代を生きる女たち

—85・9・14　第四回シンポ行わる—

第四回「女性による老人問題シンポジウム」（後援・朝日新聞社）は、今年も九月一四日に東京有楽町の朝日ホールと朝日スクエアで開催された。とくにホールでの第一部「風に向かって生きた女たち」は、明治の日本に生を享け、大正・昭和と激動期を生き抜いて、いまも現役で活躍する六人の女性が一堂に会するとあって、参加者が殺到。ホール始まって以来初めて舞台をとり外し、すきまなく椅子を並べて九百人近い聴衆を集めての熱気あふれる会となった。第二部の分科会も定員をオーバーし、ついに第三分科会はホールへ移動して行われるなど、今年も事務局はお断りとお詫びで、ひときわ暑い夏を過ごした。それでもやむなくお断りした会員の皆さん、ほんとうにごめんなさい。一部の方々からの要望をうけて撮影したビデオの上映会（十一月予定）をもってお詫びに代えさせていただく。

加藤シズエさん

＊　＊

第一部「風に向かって生きた女たち—美人長命・才女多忙—」は、五代利矢子理事の総会司会に始まり、樋口恵子代表の開会あいさつに続いて、まず今年米寿を迎えられた**加藤シズエ**さんがさっそうと登壇された。

樋口代表の質問に、加藤さんは戦前から一貫して取り組んできた産児制限運動のことや加藤勘十氏との家庭生活をユーモラスに紹介されたのち、「私の心はい

石垣綾子さん

ま十分に満たされております。幸せな老後です。老後をいかにハッピーなものにしていくかは、自分の心をほんとうに解放すること、自分が完全な自由人になることから始まると思います。ぐちを言わず、心のお洗濯をして、健康を維持し、仕事をし続けること、何よりもとらわれない心をもつことです」と語った。

前々日に米国旅行から戻られたばかりという**石垣綾子**さんはオレンジがかった鮮かな赤のドレスで壇上に華かな雰囲気を盛り上げる。自身の基礎をつくったのは大正デモクラシーだという石垣さんは、「いまは大学で勉強できる。自分の意見を主張することもできる。参政権も得ました。が、それを本当に行使していますか？　ふやけていると思います。せっかく入手した権利・主張を強く私たちが押し出せば、この世から戦争というものをなくすことができると思います」と語り、

住井すゑさん

「自分の主張を貫くということが、私に若さを保たせてくれるのかもしれません」と結んだ。

岡田嘉子さん

いつもながらの和服姿で、手を振りながら登壇したのは**住井すゑ**さん。差別のない社会を訴え続けてきた住井さんは「二十一世紀の哲学は女がつくる。それはすべての人間が平等に幸せに生きるという当然のことが実現し、ゆめゆめ戦争に駆り立てられるというようなバカなことは許されないということです」と説得力ある語調で語った。「人類の母性は、人以上の人を生まず、人以下の人を生まず」を主張する住井さんは福沢諭吉が〝天は人の上に人をつくらず……〟で一万円札になるのなら、私は百万円札ですよ、と悪戯っ子のような表情を見せ、会場は爆笑の渦に包まれた。

大正デモクラシーと共に花開いた日本の新劇運動が生き方の根にあるというのは**岡田嘉子**さん。「一つ思いこむと、どうしてもそこに行きたいと思ってしまう」という岡田さんは「幸運でした」とさりげなくサハリン亡命事件に触れたのち、福祉の充実したモスクワで死にたい、しかし「骨は日本のお墓に」と語って、「どこで終着駅に着くのかわかりませんが、私は職場で死にたい。とにかく働くこと、最後まで働いてやってゆきたいと思います」と深い表情を見せた。

聞き手の松村満美子さんとイキの合った対話を交わし、会場をわかせたのは**淡谷のり子**さんである。話題はオシャレから男性遍歴に及ぶ。反骨を貫き「すべてを歌のために」生きた淡谷さんの姿勢が伝わってきた。「インチキなものっていやですね。ホンモノが好きです。何事も基礎をしっかりすることね」と言って、

淡谷のり子さん

淡谷さんも「ステージで死にたい。歌いながら死んでいきたいです」と、岡田

丸岡秀子さん

さんと口調を合わせた。

しんがりは**丸岡秀子**さん。

「核兵器をなくし、この地球を穏かな美しいものとして残したい、それを切実に願って生きています。いつ、どこでのたれ死してもいいけれど、これからの高齢化社会に役立つ施設はつくっておきたい。そういう仕事をこれからも一所懸命にやりたいと思います。〝子ども叱るな、通ってきた道、年寄り笑うな、これから行く道〟という標語がありますが、この道を地球上からなくさぬために皆の力を結びたいと思います」。一語一語、噛みしめるように語る丸岡さんの言葉が印象的だった。

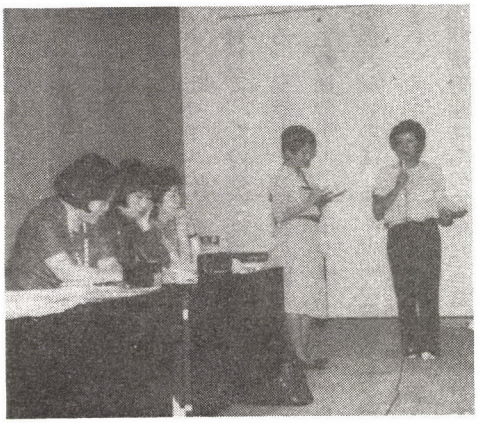
一語一語、噛みしめるように語る丸岡さんの言葉が印象的だった。

語る者と聴く者との強い信頼関係に支えられた会場に、林慶子理事が新たな連帯をよびかけて、四時間に近い会を終えて、第二部の分科会へとつないだ。

（M・F）

■第一分科会報告

老いは誰が支払うか



基調報告、樋口恵子当会代表。パネラーとして山崎泰彦氏（上智大学講師）、阿部正俊氏（厚生省社会局老人福祉課長）、暉峻淑子氏（埼玉大学教授）、沖藤典子。コーディネータは松村満美子（評論家）氏。

基調報告の中で樋口氏は、ここ一二年間の福祉、医療行政の流れが負用負担の方向にあり、それが世論となりつつあることを警告して、問題として次の三点をあげた。

①はたして今の老人に負担能力があると言えるか。とくに男女の年金格差、男約一三万円、女約七万七千円の現実において、女性老人の家計費への圧迫が非常に大きいこと。②これからの問題として、ある程度、ある額の負担はやむをえないとしても、年金の成熟と現実のタイム・ラグが費用徴収の考え方の中に欠落している。金を出す方は遅めに、金をとる方は早めにというのが現実である。③社会保障とは、個人同士の助け合いをシステム化したものだけでいいのか。基本的な部分は国及び自治体が社会的責任として支え、本人の責任によっては支えきれない部分を等しく守ることによって活力ある社会を実現するものである。

これに対して、山崎氏は、今回の年金改正は、二十一世紀に向けて、次の世代の負担増をどう抑えるかと同時に、社会保障として基礎的な部分は守ろうとする体制作りであると、十分ではないにしろ評価しうるものであるとする報告を行った。

阿部氏は、「いま、新しい扶養の仕掛けを考えていく時代である。そのためには世代と世代が支え合う連帯の社会保障が必要であり、全ての福祉を公的レベルで行うことは出来ない。ヨーロッパ的な全てを公的というものでもなく、アメリカのように全てを民的に行うものでもない、日本的な福祉のありようを探す必要がある。三六階建てビルの二〇階は公的に、一六階は民的任意性をもって取り組まねばならない」と語った。

この二氏の話に対して、暉峻氏は猛烈な反撃を行った。

経済問題の視点から見て、昭和三五年から八〇年までの推計では、〝働く人口〟と〝働かない人口〟の比はほとんど変わらない。生産力は上がりこそすれ下がることはない、なぜそんなに〝大変だ、大変だ〟と危機感をあおり立てることを言うのか、税金のとり方に対しても、例えば巨大な富をあげる十大商社とか日本船舶振興会は無税である。常にとりやすい所、弱い所から税をとろうとする姿勢こそが問題であり、厚生省は、大蔵省主計局厚生課にすぎない（大拍手）。

日本の国家の性格として、人間の命よりも金儲けを優先させる思想があまりにも強い。

ホーボワールの言葉に「老いた人たちに対して、この社会は犯罪的扱いをしている。発展という言葉の陰にかくれて、人生最後の十～二十年を廃品のようにしか扱わないのは、我々天明の破壊である」というのがあるが、それはまさしく日本の状況を指すものに他ならない。助け合いの精神の大切さについては阿部氏の意見に異存はないが、同じ敗戦国である西ドイツの比べても、日本の社会保障はあまりにも未成熟であると結んだ。

沖藤は、ごく簡単に、厚生省は施設福祉から在宅福祉への政策転換を発表したが、在宅福祉の明確なプログラムは何もないではないか、介護者の九割を占める女性の汗と涙で解決しようとする現実に対して何の解決策も示してはいないと述べ、施設老人と在宅老人の不公平を言う前に、在宅老人にも施設なみのケアをする思想がなければ福祉は後退あるのみであると発言した。

この後、山崎・暉峻氏との間に年金と貯蓄をめぐる議論、阿部氏から、福祉はボランティアだけでは決して解決出来ない、だがどうやって金を調達していくのか、などの反論が出たのち、フロアとの議論になった。

福祉の概念とは、国家として保障すべきものは、その中で個人の責任範囲は、貯蓄世界一の我々は結局は政治不信にあるのでは、などの発言があいついだが詳細は後に譲るとして、第一分科会全体の雰囲気は、我々の力で政治の流れを変えていこう、地方自治体つまりは我々の住む町の中で、我々にとって住みよい高齢化社会を作るべく働きかけていこう、さらに費用を負担することに全否定ではないにしても、それがいったい何に使われているのか、しっかり監視していこう、とする迫力に満ちるものであった。とくに女性の視点から将来の福祉を考えた時には、あくまでも公的福祉を最優先させていくこと、自助努力だけでは女の老いの貧しさは決して解決しない、この点に

ついての参加者の熱望は、全日本の女性の思いであること、その上に立って〝老いの支払い〟も可能になるというのが、第一分科会に出た者の感想である。

（沖藤典子）

■第二分科会報告

ボランティアの今日・そして明日

「まず担い手には発想の転換が必要。専業主婦から外働き主婦へ、また男性や高齢者の参加へと広がっていくべきだ。また血縁第一主義にゆさぶりをかけ、他人との連帯、地域とのかかわりの大切さに目を向けさせる力に注目したい。そして中高年女性の新しい創りの場を地域に提供していくことも検討してみたい」。

日本経済新聞記者の藤原房子氏の以上のような基調報告に続いて、ボランティアの現場から、目黒区ボランティアセンターの佐々木照子氏と世田谷ふれあいサービスセンターの五木田時子氏のレポート。

「ボランティアの担い手が高齢化している。安上がり福祉の一端を担うものといわれながら、ヘルパー派遣まで手続きが一カ月もかかる現状では、ほんとうに困っている人たちに手をさしのべられるのは、ボランティアしかない。しかももっとも要求が多いのは家事サービスだ」（佐々木氏）。

「ふれあいサービス実践の体験から、多くの人たちが有料でも公的サービスを望んでいることがわかった。また、ボランティアたちも老人から学ぶことの多かったことを報告している」（五木田氏）。

3人のパネラーからは、次のような意見が述べられた。

「若い世代が、生活経験を豊かにするという立場からもボランティア活動を見直してみたい。実際に若者たちに体験学習させると、目を輝やかせ生きいきとする」社会活動教育研究所長・新谷弘子氏。

「施設は受け手としてだけでなく、老人も積極的に活動をしていくべきだ。それが生きがいにもつながる」東京都医療社会事業協会会長・中村雪江氏。

「自分の目で身のまわりを見まわせば、ボランティア活動ができる。たとえば老人の小世帯にきゅうりを一山盛りではなく一本売りしてあげるのが、八百屋さんのボランティア。ただし、公的福祉までを担おうとしても無理。おのずから限界があり、公的責任とは一線を引くべきだ」毎日新聞論説委員／東京ボランティアセンター常任理事・坂巻熙氏。

会場からは有償・無償をめぐって、また活動のあり方やボランティアの能力の問題、日本特有の閉鎖性とのぶつかりあいなど、さまざまな問題が出された。

（高見澤たか子）

■第三分科会報告

いま〝ついのすみか〟を考える

＜基調報告：袖井孝子（当会理事・お茶の水女子大助教授）、パネラー：山本茂夫（武蔵野市福祉部老後福祉課長）、吉田あこ（内藤建築事務所主任研究員）、橋本司郎（朝日新聞編集委員）、小島道夫（住宅・都市整備公団東京支社住宅事業第一部長）、レポーター：小山康子（当会運営委員）、コーディネーター：清水和子・金谷千都子）

＊　＊

人はどこで老いるか、他人の介助を必要とするようになったとき、どこに住み、どのように住まうか、〝ついのすみか〟の青写真は早くから描くにこしたことはない。ただし、住みたい所に、住みたいように住めるには、各場ごとに応じた条件が必要となる。

これを、住み馴れた所で老いるためには地域での福祉サービスはどうあるべきか、その住むべき家はどんな機能を備えたらいいか、また共同生活の場としての有料老人ホームは私たちのニーズに応えうるものかどうか、公的な施策では住宅、住環境をどのような方向で考えているか、といった点にしぼり、パネラーを中心に考察した。

はじめに、袖井氏から、すまい方を同居型、自立型、共同生活型の三つに分け、各ケースの特徴、問題点、必要条件などが指摘され、さらに、すまいそのものについては、老人の多様なニーズに合わせ、すまいもワンパターンに限定されるべきではないとの基調報告がなされた。

山本氏は、武蔵野市福祉公社が在宅福祉サービスを重視して行っている事業の実態を報告され、自助を助けるサービスが目標であること、徐々に機能が劣えていく過程にいかに対処していくかが地域福祉では必要と指摘。吉田氏は、身体的劣えを考慮した家づくりと同時に、介護者の労力を軽減し、心を十分にかけられる住宅の開発を説かれ、モデルハウスを紹介、この機能はすべてのすまいに備えるべきだと強調された。

橋本氏は有料老人ホームは営利事業であり、そこに福祉があると思うのは幻想、高い買い物をすると思えば間違いないとの意見を披露。小島氏は、今後の事業を考える上での検討課題を説明、公団の取り組み方の方向を示された。続いて、小山氏から有料老人ホーム選びのチェックポイントの報告があり、会場からも有料老人ホームや寝たきりになったときの問題点が出されたり、仲間との共同生活を始める準備が着々とすすんでいるとの報告もあったが、テーマが幅広く、多岐にわたっているため、問題提起にとどまった形で閉会となった。（金谷千都子）

はじめて自前で行った
第四回シンポジウムを無事、終えて

電話も仕事もパンクしそうだった事務局のここ一カ月、委員、ボランティアの頭と手足総動員の結果、第四回女性による老人問題シンポジウムは文字どおり盛会裡に終了しました。

朝日ホール始まって以来という大量の補助椅子を持ち出し、その大ぜいの人々が平均八二・五歳の「美人長命」の話にうなずいたり爆笑したり。まさに舞台と会場が一つになった集会でした。

夜の三つの分科会は、各専門分野の方たちの協力を得て、時には激しくわたり合う対立意見も含めて充実した話し合いが時間いっぱいまで続きました。

この間、看護婦のボランティアにも待機していただきましたが、事故ひとつなく、担当者一同ほっと胸をなでおろし、これまたボランティア・カメラウーマンの手による写真を眺め合いながら、充足した余韻にひたっているところです。それもこれも、日ごろからこの会を支えて下さる会員皆様の有形無形のご支援のおかげと、ここに厚く御礼申し上げます。

とくに感慨深いのは、ことしはこのシンポジウム始まって以来、資金的に全く自前で開催した初めての集会だからです。

昨年来のカンパ、委員その他ボランティア、ご出講の先生方の、当会の意気に感じての低謝金、朝日新聞社の後援、プログラムへの広告スポンサー、多くの方々のご協力のおかげで、まずは赤字にならずにあの集会を開くことができました。

素人集団の私たちの力でも、資金的にもやればできる、という自信がまた一つ重ねられたような気がします。これからも多くの方々の信頼と支援をいただけるような活動を皆様とごいっしょに続けていきたいと存じます。

第一部は、これまた会員のコネのおかげで低料金でビデオに収録することができました。

入場料をお払い込みいただいたのに、定員オーバーでやむなくご返金した皆様、会員の中には少ないと思いますが、まことに申しわけございませんでした。その方々のためには、十一月二〇、二八、十二月六日にビデオを見る会を開くことにしました。

今、事務局はそのアフター・サービスに大忙しです。お礼のついでに申しわけありませんが、こうした繁忙期、ボランティアをしていただける方、事務局にご登録いただけると幸せです。ほんとうにありがとうございました。

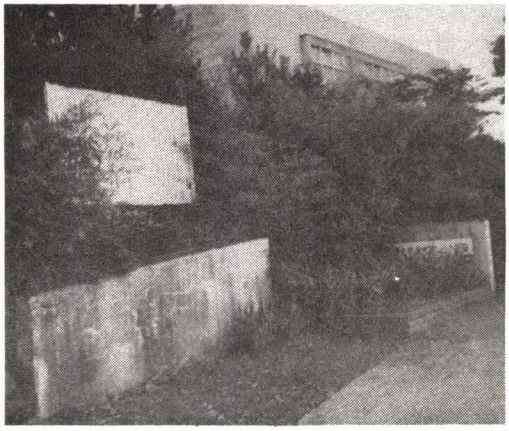
樋口　恵子

老人ホーム探訪③

大宮 しらさぎ荘　宿泊記

東京のベッドタウンともいえる交通が便利な所に位置する厚生年金大宮しらさぎ荘を訪ねてみました。

㈶厚生団（全国のサラリーマン等が加入している厚生年金で被保険者や年金受給者に、年金以外の形で福祉をより充実させるために設置され政府の委託により運営されている公益法人）が経営している



るので、有料老人ホームと呼ばれてはいますが、比較的安い費用で快適な生活が可能となっています。近くには大宮公園があり、園内にボート池、遊園地、植物園なども揃っていて、とても恵まれた環境の中にあります。入居者の定員は七二名、そのうち東京と埼玉からの入居者が三五名前後で他県から二～三名という構成になっています。また、若い方が多く見えましたが平均年齢は七五歳とのことです。老人大学（月二回）や、歩こう会などのカルチャーも活発に行われています。そして都心に近いせいか観劇会や習い事に外出される方もかなり多いようです。さて、老人ホーム利用と費用は次のとおりとなります。

①利用料

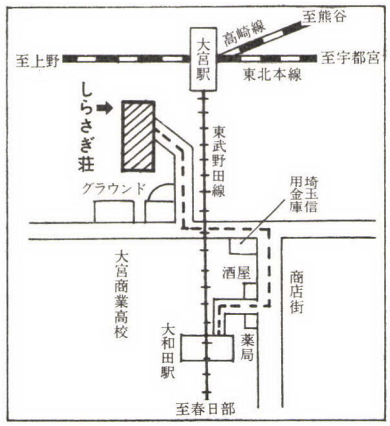
種別／区分	受給者 個室	受給者 相室	その他 個室	その他 相室
45畳	五四六〇〇円		五九九〇〇円	
6畳	五五九〇〇円	五〇九〇〇円	六一四〇〇円	五五四〇〇円

②入居時保証金（原則として退去時に返還される）

受給者は一〇万円、その他は一五万円、食事代（一日三食）が含まれていますが、電気料の超過分と冬期には暖房費が必要です。

次に、食事時間ですが朝は七時半からで昼は一一時五五分、そして夕方は五時となっています。メニューはバライテーにとんでいて味つけもよく、とてもおいしくいただけました。さらに、補足しますと、ホームでは身の回りのことは自分でできることが条件となっていますから、日頃の健康管理には各自が十分注意しておくことが必要だと思いました。なお、現在三〇名ぐらいの方が入居の待機中とのことでした。

（Y・K）



オープン・ハウスに参加して

畑中由喜子

八月のオープン・ハウスの日は朝からムッとする真夏日で二時間余りをかけて上京した私達三人にとって久し振りの東京は一層ムシ暑く感じられました。私たちの住む葉山という町は、戦前はその温暖な気候から、避暑地、避寒地として、戦後は東京のベッドタウンとして開かれて来た所です。その温暖さ故か、老齢人口が多くそのため早い対策が望まれるところなのですが、今まで何一つ手が打たれていないというのが実情でした。そんな街にもいくらか新風が吹き始め、今年一月に待望の女性議員が初めて誕生致しました（前号をご参照下さい）。今までにはまるでなかった女性の視点から確実にやってくる高齢化社会をいかに暮らしやすいものにしていくかを第一の課題として、私達の会は動き始めました。

さてオープン・ハウス当日の事務所は、九月一四日のシンポジウムと会報の発送準備とで、それはもう大変な混雑の最中でした。私達三人もそのお手伝いをしながら皆さんのお話を伺った訳ですが、現在活発に活動をして居られる方の中にはかなりご高齢の方もいらっしゃるとのこと、感銘を受けたと同時にそれは驚きでもあり、今後はもっと若い世代の積極的参加が望まれると実感致しました。結局それは子供の頃からの教育の問題でもあるのではないか、思いやりの問題でもあるのではないかと思われてなりません。

老いは誰の上にも必ず訪れるものであるにも拘らず、それをささえる活動は地味でしかも労苦の伴う事も多いためか、中々省みられません。その上、経済低成長時代に入ると老人福祉は真先に削られる始末です。利潤と能率を第一に追求する現在の産業社会に於ては弱い者にまずそのシワ寄せが行ってしまうのです。けれど私達が本当に望む豊かな生活とは自然との調和であり、温い心のつながりであって決してお金だけで得られるものではないということ、よりよい高齢化社会の実現のためには、諸設備、諸サービスの充実をはかる事はもちろん急務ですが、さらにもう一歩踏み込んで、金銭至上主義にとらわれることなく、より多くの人が、人間として、地球に住む一員としての自覚を持つ必要があるのではないかと思うこの頃です。

声

いつもいつも会報を読んでは元気づけられています。

七四歳になる実母を看護しておりますが、数えきれない程の病気を持っており、リューマチの痛みにさいなまれ、昨年夏の脳挫傷の後遺症はボケを伴い、母の身体をベッドから離すことができません。家庭看護も商売をしている嫁家先でのことと、リハビリ等思うようにできず悩みます。私などは序の口で、皆さんのご苦労を思えば、勉強と言い聞かせがんばっています。

（練馬区　森文江）

グループ紹介

高齢化社会を自分の問題として考える会

東久留米市「高齢化社会を自分の問題として考える会」は、㈶あしたの日本を創る協会に推されて三年前に、市民有志の手により産声をあげました。故松原治郎先生も参加して下さり、術後に出席されたお帽子と杖の痛ましいお姿を、忘れることができません。

東久留米市は人口一一万、二〇年前一万の純農村が、東京のベッドタウンとして急変貌しました。世帯構成の八〇％がサラリーマンです。幾つもの団地もできて、次々に移入した人達が団塊的に定年を迎える時期にきています。子供達は外に出て高年者が残るので、今は五％の六五歳以上人口比指数は更新されて、二一世紀に入る頃には全国指折りの高齢者のまちになると予測されています。

私どもの会は、高齢化社会を地域問題と捉えて、これまで学習会・シンポジウム・先進地区見学などをしてきた末、昨年九月、市民自由大学を設立しました。学科別イベントにより、会員数一〇〇名になりました。特に成果をあげているのは陶芸教室で、よき指導者を得て〝東くるめ焼〟が創り出されました。市の遺跡の土を混入し、梅の木や栗のいがの灰釉で彩る正味の地場産です。大手スーパーの協力で催したチャリティ即売会で大好評を得ました。これを地場産業に育てて、高齢者の生き甲斐と生産活動の場にしたいとユメをふくらませています。企業一辺倒できた男性が地域でどう生きるのか、わがまちの深刻な課題です。誰もが住みよい高齢社会を創るために、世代をこえた知恵と力の結集をよびかけて、活動を続けていきたいと願っています。

連絡先〒二〇三　東久留米市学園町二―一八―一八　加藤照子

声

福祉の見直しと一般にいわれておりますが、国の財政的理由による見直しではなく、時代の要求に対する見直しこそ大事であり、この「中間施設」のご意見は正によい機会によき提案がされたこととうれしく思いました。

私は現在、厚生省の施設運営費の検討委員会や地域の老人問題についての市長の諮問を受けて検討中でございますので、意見書に国レベル及び地方レベルで広く問題提起となり、よき方向づけのための手だてとして大変有難く拝見させていただきます。「高齢化社会をよくする女性の会」のそれぞれのメンバーが、それぞれの立場で出来ることを着実に実践してゆき本来の目的に向かって前進してまいりたいと存じます。（相模原市　A・O）

第四回シンポに参加して

練馬区　芹沢茂登子

急に涼しさが増し、戸惑うこと二～三日でございます。一昨日はシンポジウムに参加させていただきましてありがとうございました。

加藤シヅエ様をはじめとして、明治、大正、昭和を生き抜き、生を全うしておられる先達の方々のお話は、そのおこと

ばの一つ一つに歴史の重みがあり、胸打ちふるえるような感動を味わうことができました。私もまた新たな目標をもって生きていこうと勇気が沸いてまいりました。

民間企業という組織の中で、社会福祉的または行政が行なうべきような内容を持つ電話相談を継続させることの難しさをいやというほど感じて苦慮する毎日ですが、六人の方々から得た感動を火種にして、また歩んでいきたいと思っております。

五〇代などは、まだまだ六合目ということを思い知りました。八〇代を目ざして生き生きと生きたいものです。

当会横浜会員「よこはま女性フェスティバル」でフィルム・フォーラムを企画

前号の参加呼びかけに応えて、清水、藤久両理事をはじめ、二十数名の横浜在住会員が、九月二一日、婦人コーナーに集い、横浜地区の会員の連帯を図るため、「よこはま女性フェスティバル」の企画参加を決定した。

決定内容は以下の通り。

。**内容　フィルム・フォーラム「痴呆性老人の世界」（岩波映画）**

助言者に同映画の監督羽田澄子さん、当会代表の樋口恵子さんを迎える。

。**日時　一一月一三日（水）夜六時半～八時半（開場、五時半）**

。**場所　横浜市西センター**（交通　横浜西口徒歩一〇分、または相鉄線平沼橋下車）TEL〇四五・三一四・七七三三

。**会費**　五〇〇円（前売券三〇〇円）

。**定員**　一〇〇名

「痴呆性老人の世界」は、今秋、完成したてのもので、ある病院に入院中の痴呆性老人の姿をとらえた記録映画。

国連婦人の十年最終年を記念して行われるフォーラムの一環として、老人問題と女性問題を絡めて、大いに語り合うため、皆様の参加をお待ちしています。

（ご連絡は三〇日までに）

。問い合わせ先　望月幸代（夜間のみ）

〒二四一　横浜市旭区四季美台七三

TEL　〇四五・三六一・〇三三七

関西地区有料老人ホーム入居希望者説明会　**入場無料**

主催／㈳全国有料老人ホーム協会

〔日時〕十一月八日（金）午前十時半開場

〔場所〕京都商工会議所（地下鉄・丸太町駅下車）

〔内容〕①有料老人ホーム入居相談（四時まで）全国の有料老人ホームの施設担当者がご相談に応じます。

②講演（午後一時～三時まで）入居契約についての留意点など予定　講師＝玉田弘毅氏（明治大学教授）、橋本司郎氏（朝日新聞編集委員）、他

お申し込みは、ハガキに住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入のうえ、東京都中央区銀座三の三の一（東邦生命ビル）㈳全国有料老人ホーム協会へ。お問合せ、電話申込みは電話・東京〇三―五六七―四五八〇

事務局だより

涼風の立ちそめた九月一四日、有楽町マリオンで開かれた第四回シンポジウムは、活気と熱気に満ちあふれたものになりました。盛会を喜ぶ気持と同時に、混雑のため、気分の悪くなるかたが出るのでは、という一抹の不安もありましたが、おかげさまで何の事故もなく、無事日程を終了することができました。シンポジウムの当日は勿論、開催準備等に、お忙しい中をご協力くださいました会員諸姉に、心からの感謝を捧げます。

独立採算、独立企画、独立運営と、すべての点で、本会発足以来、はじめて一人歩きしたシンポジウムでございましたから、事務局としては、至らない点が多々あったことと思います。反省をこめて、来年こそは完璧なシンポジウムをと執念を燃やしております。何卒今後ともご支援をお願い申し上げます。

この会報がお手もとに届く頃は、もうそろそろ年末のご予定が皆さまのスケジュールに入ってくるのではないかと拝察致します。その折、もし会費が未納になっておりましたら、ぜひご予算の中にご計上くださいますようお願い致します。

■お知らせ

。シルバー・クリスマス

早いもので、恒例のシルバー・クリスマスの日が近づいてまいりました。一二月二一日（土）、中央区京橋二―二―八、明治屋ビル七階（電話03―271―6640）で、午後一時から開催の予定です。詳細は別途お知らせ致しますが、くじ引きやおみやげもある楽しいお料理講習会にしたいと思っております。

。第四回シンポジウムのビデオ

第四回女性による老人問題シンポジウム「風に向かって生きた女たち」のビデオが完成しました。地方会員に限り、テープをお貸し出し致します。貸し出し料金は五千円の予定です。ご希望のかたは事務局までお問い合わせください。

。ビデオを見る会

右のビデオを、九月一四日当日ご参加いただけなかったかたがたのために、十一月二八日（木）、午後一時から四時半まで、東京都婦人情報センター（新宿区神楽河岸二―一、セントラルプラザ一五階、☎03―235―1140）で映写致します。事務局までご連絡を。

。第三回シンポジウムの記録

昨年江の島で開催されました「フェスティバル・女性がつくる老後の文化」の記録が、「女・老いをたのしく」というタイトルで、ミネルヴァ書房から刊行されました。定価千七百円を、会員特価千六百円でおわけします。

。オープン・ハウス

一〇月二八日（月）、定例通り午前一一時から、事務局で行います。

。ウィメンズフォーラム'85

事務局が本会と同じ802号室にある日本婦人問題懇話会では、「ゆれ動く現代――女たちの明日を考える」と題して、一一月二日、九日、一六日に、東京都婦人情報センター（前出）で、フォーラムを開催します。

参加ご希望のかたは☎03―352―4956へご連絡ください。